



カフェからの眺め



三人冗語の石



目次

次回展示のお知らせ	コレクション企画「鷗外と詩歌 時々のおもい」
寄稿	「沙羅の木の花」倉本幸弘氏 <small>（森鷗外記念館常任理事・日本工業大学共通教育系非常勤講師）</small>
展示報告	特別展「鷗外が見た風景～東京方眼図を歩く～」
寄稿	「明治時代の榛原」藤本敦美氏 <small>（榛原 聚玉文庫）</small>
ショップ・カフェ便り	
活動報告	2013年3月～6月
これからの催しもの	2013年夏のプログラム
コラム	From 観潮楼主 No.3

文京区立森鷗外記念館 コレクション企画

『鷗外と詩歌 時々のおもい』

明治の文豪 森鷗外は、たくさんの詩歌を残しています。

鷗外が作った詩歌は、鷗外やゆかりの人々の雑誌「めざまし草」「スバル」「心乃花」「明星」などに掲載され、『水沫集』、歌集『うた日記』、『沙羅の木』等にまとめられました。

鷗外の作詩は、東京大学医学部生の時にはじまります。年上の同級生が漢詩をつくるのを見てはじめて、師について漢詩や和歌を習っていました。留学から帰国後には、ドイツで触れたヨーロッパの詩を井上通泰、落合直文や弟妹とともに漢詩や詩に翻訳、雑誌「國民之友」附録『於母影』として

て発表されました。

鷗外の作る詩歌は、人との出会い、陸軍軍医という出張の多い仕事柄その環境により変わっていきます。

日清戦争では、従軍記者の正岡子規（俳人）に出会い、俳句の話をしており、帰国後は子規の句会に参加するなど俳句をよくしました。1897（明治30）年頃には歌人佐佐木信綱や與謝野寛と出会い、1904（明治37）年から赴いた日露戦争では、信綱が贈った万葉集を携え、短歌や詩などを作り、日本へ送られたハガキにはたくさんの詩歌がありました。

1922（大正11）年1月には、帝室博物館総長として毎秋出張した奈良を詠んだ「奈良五十首」を発表しました。

鷗外は、様々な詩歌人が出会う場も創出しました。1907（明治40）年から観潮楼で行われた短歌会では、寛、伊藤左千夫、信綱などのもとに集う石川啄木、齋藤茂吉、北原白秋、高村光太郎など若い人々が訪れ、流派を超えた交流が生まれました。この時期、鷗外は伝統的な短歌の会となる山縣有朋の「常磐会」の幹事も賀古鶴所とともに務め、積極的に参加していました。

鷗外にとって詩歌は常に身近にあり、そ

の時代、時々のおもいを表現する手段の一つだったのです。当館所蔵の自筆原稿やハガキ、掲載誌などから鷗外の詩歌をご紹介します。

■同時開催ミニ企画…
高村光太郎生誕130年記念
駒込千駄木林町の詩人高村光太郎と鷗外

関連事業

関連講演会のお知らせ

コレクション企画期間中に関連講演会を予定しております。
詳細は決まり次第、HPやチラシ等でお知らせいたします。

会場…文京区立森鷗外記念館 2階講座室
料金…無料
定員…50名（事前申込制）

ギャラリートーク

当館学芸員が展示解説を行います。
7/10、7/24、8/14、8/28
（いずれも水曜日）
各回14時（30分程度）
申し込み不要。（展示観覧券が必要です。）

期 2013年6月28日（金）－9月8日（日）
会場 文京区立森鷗外記念館 展示室2
開館時間 10:00～18:00（最終入館は17:30）
会期中の休館日 第4火曜日（7月23日、8月27日）
特別展観覧料 一般300円（240円：20名以上の団体）
中学生以下無料
障がい者手帳ご提示の方と同伴者1名まで無料



日露戦争中長男於菟に宛てた葉書
明治38年7月13日付
短歌一首



長男於菟に宛てた葉書
1905（明治38）年5月24日
詩「春」



『うた日記』春陽堂 1907（明治40）年刊



雑誌「スバル」3号 1909（明治42）年
裏絵 観潮楼歌会の様子（パネル）



雑誌「國民之友」58号附録
1889（明治22）新聲社 訳詩集『於母影』



日露戦争中長男於菟に宛てた葉書
1905（明治38）年10月25日
俳句一首

寄稿

沙羅の木の花

倉本幸弘

（森鷗外記念館常任理事・日本工業大学共通教育系非常勤講師）

初夏、木の花の季節です。卯木、楠、榎、合歓、花水木などを。

森鷗外記念館の敷下通り側の入り口に「観潮楼址」と石に彫られた門標があります。この字は佐佐木信綱（一八七二―明治五年―一九六三年＝昭和三八年）の手によるものです。

佐佐木信綱といえは、唱歌「夏は来ぬ」の作詞者です。歌人であり、優れた国文学者でもあったこの人の名を、そしてこの「夏は来ぬ」の歌を知る人もだんだん少なくなってきました。

けれども、今日でも、五月の中ごろ、テレビ・ラジオ番組、街角のスピーカーから、この歌が流れているのを耳にすることがあります。

この「夏は来ぬ」の歌詞には木の花が詠い込まれています。「卯の花の匂う垣根に…」「橘の薫る軒端の…」。「榎ちる、川べの宿の…」。「いずれもいずれも夏の訪れを告げる木の花です。そして、それらの木の花



「沙羅の木」詩碑

のことを意識しながら東京の街を歩いてみると、あざさ色の空の下、処々で、これらの木の花の咲いているのを見かけることができます。

森鷗外の旧居（観潮楼）址の庭においても、この時期、咲くのを待たれる木の花があります。沙羅の木の花です。

今、鷗外が住んでいた頃の庭を偲ぼせるものは、大銀杏、三人冗語の石、根府川石、そして沙羅の木です。いずれも、鷗外の住んでいた時からのもですが、沙羅の木だけは戦災で焼け枯れてしまいました。

戦後、焼け跡の観潮楼の庭に佇んだ詩人の野田宇太郎は

「観潮楼のあとの元は庭だつたところに土に埋もれた灰褐色の根府川石がみえる。かつて邸内の庭石であつたが、これこそ鷗外が「沙羅の木」の詩に

樹色の根府川石に
白き花はたと落ちたり
ありとしも青葉がぐれに
見えざりし沙羅の木の花



沙羅の木と根府川石



沙羅の木の花

とうたつた、その根府川石でもあらう。沙羅の木の友づなを失つた石は、心なしかさみし気でさへある。」と記しています（『東京文学散歩』より）。

その後、根府川石のすぐ傍に在りし日のままに沙羅の木が植えられました。永井荷風の手による「歌碑」も作られました。昭和二九（一九五四）年、鷗外三十三回忌の年のことでした。

今、森鷗外記念館の庭に生えているのは鷗外の頃からすると、何代めかのもので、すぐ傍に聳える生命力の強い銀杏の木に比べ、繊細な木で、陽射しが強過ぎてはならず、全く日が射さなくてもならず、環境が変化すると、時には枯れたりすることもあ

るのだそうです。
その花は、毎年、六月の初めごろから咲き始めます。白く可憐な花で、鷗外の詩に詠われているように青葉に隠れるようにして花をつけます。ですから咲き始めの頃は、咲いていることになかなか気がつきません。朝、まさに根府川石の上に花を落としていくことにより気がつくのです。それからお

よそ半月ほど、六月の雨にうたれながら咲いては花を落とし咲いては花を落とし続け

ます。
鷗外は、根府川石の上にはたと落ちる瞬間を見たというのです。「ありとしも青葉がぐれに、見えざりし」とあることから、それは最初の一輪であったはずですが、その時、鷗外の心を過つたのはどのような感慨だったのでしょうか。今まさに絶えようとするはかない花の生命の最後の輝きへの感動でしょうか、それとも花の清らかな死への哀惜でしょうか。

そして、蕾のすべてが花となり、そのすべてが散り落ちると、まもなく七月九日、鷗外忌がやってきます。

春の特別展

「鷗外の見た風景」

「東京方眼図を歩く」

会期：2013年4月19日（金）

6月23日（日）

会場：展示室1、2

鷗外が1909（明治42）年に立案・刊行した地図「東京方眼図」は、地図が方眼で区切られ、地名索引で現在地や目的地が検索できるというものでした。

今回の特別展では、「東京方眼図」が刊

行された明治40年代の東京の風景を、鷗外の「当用日記」に登場する街、そして1910（明治43）年に発表された小説「青年」に描かれた風物から紹介しました。さらに、中央の床には、「東京方眼図」を5倍に拡大した3×4mのカーベットを敷き、その上を歩いていただきました。

展示室1

鷗外が留学先で使用したドイツ・ミュンヘンの地図、収集した日本の地図、そして「東京方眼図」の一枚図を、使用方法が添付された地名索引の冊子（帖仕立本）と一緒に並べ、鷗外と地図のかかわりを紹介しました。

鷗外の「当用日記」の1908（明治41）年および1909（明治42）年から、鷗外や家族が出かけた新橋、日本橋、銀座の景観を、絵葉書や石版画や錦絵で眺め、それぞれの街や時代を象徴する風景——新橋の停車場、銀座・資生堂の商品や広告、日本橋・榛原の千代紙といった当時の文物を展示しました。現存する社寺などを東京方眼図上に見つけて、鷗外の生きた当時と現在とのつながりを感じた、鷗外も訪れた店が現代まで続いていることに感激したとの感想をいただきました。



展示会場（展示室1）

展示室2



展示会場（展示室2）

鷗外作品に見る東京を紹介しました。「東京方眼図」刊行の翌年に発表された小説『青年』の主人公は、「東京方眼図」を片手に東京を歩きます。初音町（現・台東区）に住み、電車で神田や柳橋へ移動し、上野界隈で散歩や食事をし、有楽町まで観劇に向きました。『青年』に描き出された風物を中心にそれぞれの場所をみつめました。

団子坂の菊人形、東京大学を中心とした本郷の街並み、上野公園の博覧会や上野駅、神田須田町の複雑な電車路線など、街の情景や都市機能をあらわした石版画や写真、地図などを、作品で描写された箇所とともに紹介しました。鷗外ゆかりの劇場、有楽座と歌舞伎座の外観写真や、そこで上演された鷗外作品の舞台写真も展示しました。千駄木散策の途中でお立ち寄り下さった方々からは、街探訪に加え歴史散策も味わ



外観（大観音通り・団子坂側）の案内表示

えて面白かったとの声をいただきました。「東京方眼図」をご覧になり、それぞれの明治40年代を思い描いていただけたようでした。

末筆ながら、本展覧会を開催するにあたり、貴重な資料をご提供くださり、また多大なご協力を賜りました方々に、深く感謝の意を表し、心より御礼申し上げます。



ギャラリートーク

寄稿

明治時代の榛原

藤本敦美（榛原紫玉文庫蔵）

榛原は文化三（一八〇三）年創業。当時より日本橋に「雁皮紙」の暖簾を掲げてきた和紙舗です。雁皮紙の紙質の良さは書写に適合ということで文筆家の方々に好評を博してまいりました。また榛原では江戸時代より酒井抱一や河鍋暁斎、柴田是眞、川端玉章、竹久夢二など多くの絵師・画家に絵を依頼し、それを原画とする摺物を販売。これも多くの愛好者を獲得することとなりました。

先の「鷗外の見た風景」東京方眼図を歩く」展の出品作である川端玉章原画の木版摺千代紙「柏に松葉」もこうした榛原の方針から誕生した商品です。鷗外と玉章が旧知の仲であったのと同様に、榛原の三代目当主榛原直次郎と玉章も密な交流がありました。こうした交流から榛原では玉章に多くの原画を依頼。玉章もこれに応じ「柏に松葉」を含む十種の千代紙や団扇、絵封



川端玉章作千代紙「柏に松葉」 榛原紫玉文庫蔵

筒、絵短冊、大小曆など様々な摺物の原画を描き、榛原でこれを摺物として販売致しました。

さて、榛原と鷗外ですが、実は鷗外も榛原の商品を使用していた、ということを森鷗外記念館様より先日ご教示頂きました。夫人の森志げ、娘の森茉莉も文章中に榛原を登場させて下さっておりますから、ご一家で榛原を愛用して下さっていたのでしよう。あるいは榛原の店先で玉章原画の千代紙をご覧になったのかもしれない。

明治時代の文芸と美術は様々な繋がりがあったことが知られておりますが、榛原も両者と近い場所にいたようです。鷗外の他に、当時の文豪では小泉八雲や永井荷風、高村光太郎、谷崎潤一郎、芥川龍之介といった方々も榛原の商品を使用して下さっておりました。例えば、谷崎潤一郎は榛原の水引や糊入紙について文章中で触れ、その文章の挿絵を錦木清方が描き、また錦木清方は榛原で団扇絵の原画を描いた、ということもあります。こうしたことは偶然とはいえ、榛原が日本橋の地で永きにわたり店を構えてきたことと無関係ではなく、明治時代の榛原の一面を伝えるものといえるでしょう。



榛原製方眼原稿用紙 当館蔵
鷗外の自筆原稿類の中に見つかった。



ショップ便り

特別展記念グッズ「東京方眼図」の一枚図を複製、販売しています。観覧の記念におすすめてです！ ご好評につき特別展終了後も販売予定ですので、この機会にぜひお求め下さい。

特別展期間中は、日本橋・榛原のコーナーも登場。レターセットや絵葉書、ノートなど人気商品をセレクト販売しました。お土産に最適な、色鮮やかな品々が店頭を飾りました。ちなみに、鷗外夫人の小説集の見返しに使われたのも、榛原の千代紙だそうです。



特別展記念グッズ「東京方眼図」



日本橋・榛原のコーナー



カフェ便り

カフェ・モリキネでは5月より、アイスコーヒーとアイ스티ーをご用意。涼やかなお飲み物でおくつろぎいただけます。

店内からは、ガラス壁越しに四季折々のお庭をお楽しみいただけます。6月中旬〜7月初旬は沙羅の木の開花時期。沙羅の木は観潮楼の庭にもあり、鷗外が詩に詠んだ木です。カフェのすぐそばに植えられていますので間近でご覧いただけます。

沙羅の木を眺めながらアイスメニューで涼んではいかがでしょうか？



冷たいお飲み物でひと息

営業時間
ラストオーダー
11時〜17時
16時半

実施事業

2013年3月	2013年4月	2013年5月	2013年6月
16日 14時～16時 朗読会 「電車窓」 高瀬修子	6日 14時～15時 親子プログラム 下駄木のメトルと若い人々 俊成・晶子・茂吉を中心に 清田文武	18日 13時～15時 親子プログラム 「本のおはなし 森鷗外と外国の物語」 徳田悦子	1日 11時～12時半 朗読会 観瀨楼から文京区立森鷗外会館開館まで 倉本幸弘
20日 13時～15時 親子プログラム ブックマークをつくらう 富山加代子	23日 10時～12時 NHK文化センター共催 文豪の世界へのいざない 十重田裕一	9日 14時～15時半 展示関連講演会2 「いま・ここ」への注視―明治40年代の鷗外― 須田喜代次	29日 11時～12時半 朗読会 森鷗外の生涯2 福岡・観瀨楼 倉本幸弘
30日 10時～12時 朗読会 「電車窓」(自主事業) 森鷗外と家族の住んだ街―北千住・千駄木・本郷 倉本幸弘	25日 15時～16時半 展示関連講演会1 鷗外「散歩する「青年」と「雁」」 坂崎重盛	15日 11時～12時半 朗読会 森鷗外の生涯1 誕生・ドイツ留学 倉本幸弘	11日 14時～15時半 展示関連講演会 「いま・ここ」への注視―明治40年代の鷗外― 須田喜代次

朗読会

記念館初の朗読会は、元NHKアナウンサーで現在は跡見学園女子大学教授の広瀬修子先生においていただきました。朗読作品は『高瀬舟』と『電車窓』の二作品。まずは『高瀬舟』。先生の穏やかな声調がひろがると、講座室はあつという間に高瀬舟の世界へ。観客は知らぬ間に、船頭・庄兵衛か罪人・喜助か、それぞれの心持ちになって物語に聴き入っていました。台本をめくる紙首までもが神々しく、作品のモチーフが否応なしに私たちに問い掛けてくるようでした。

休憩を挟んで『電車窓』。この作品は主人公の「僕」が市電に乗り合わせた「鏡花の女」を観察しながら、空想するという物語です。「冬の午後四時半である」と始まると、観客は一瞬にして集中。電車の窓からみえる風景が細かく描写される中、とりとめもなく続く「僕」の空想。まっすぐに響く先生の声とその余韻の共鳴が、現実と空想の混沌を浮き彫りにします。「僕」鷗外なのかと微笑んでしまう、そんなひとりが味わえました。



日時 2013年3月16日(土) 14時～16時
講師 広瀬修子氏 (跡見学園女子大学教授)

親子プログラム

ブックマークをつくらう!



日時 2013年3月20日(水・祝) 13時～15時
講師 富山加代子氏 (クラフト・インストラクター)



手作りのチャームつきブックマーク

春分の日、1年生から4年生の親子3組9名が参加されました。子供たちはブックマークを、保護者はキーホルダーを制作。粘土でチャームを作って色々々なパーツで飾り、ブックマークとキーホルダーの金具につけて完成です。

キーやお花やリボンなど思い思いに形作ったチャームを、好きなパーツで飾る作業が盛り上がりしました。パーツ選びに迷ったり、いろんな色に魅せられたり……。いつのまにか親子で夢中に！それぞれ工夫を凝らし、とても素敵な作品ができあがりました。仕上げは先生のお手を借り、作品は紙に包んで大切に持ち帰りました。

鷗外が子供たちとの散歩や勉強を親子の憩いのひとときとしたように、ご参加の皆様も手作りの面白さを親子で堪能していました。「子供と別の作品を作成させて頂き、とても充実していました」との感想を頂戴しました。今回のブックマークをおともに親子で本や読書を楽しみたいものにしていただければ幸いです。

親子プログラム

「本のおはなし」

森鷗外と文の京の作家たち

協力：全国学校図書館協議会

親子で文学の世界を楽しむプログラムです。まずはじめに、当館館長の案内で、参加者全員で展示会を鑑賞しました。展示会の内容からクイズが出されることになったので、皆真剣。講座室にもどって、先生がクイズを出したときには、皆全問正解という好成绩でした。

文京区は森鷗外をはじめさまざまな作家が暮らし、作品を生み出した街です。夏目漱石や樋口一葉、小泉八雲、宮沢賢治らが暮らした地域を地図でたどりながら、紙芝居や絵本で各作家が書いた作品を鑑賞していきましました。

カーベットの座に座った子供たちは、先生が読んでくれるおはなしに次第に夢中になり、前のめりになって聞いている様子が印象的でした。

子供たちを周りで見守るお父さんお母さんたちも、子供のころを思い出して楽しまった様子で、笑い声も聞かれ、「私が勉強になりました」という感想もいただきました。当プログラムを機におうちでも親子で本のお話をしていただけたらうれしいです。



日時 2013年3月23日(土) 13時半～15時
講師 石橋幸子氏 (司書教諭)

コレクション企画関連講演会

「千駄木のメトルと若い人たち―俊成・晶子・茂吉を中心に」



日時 2013年4月6日(土) 14時～15時半
講師 清田文武氏 (新潟大学名誉教授)

コレクション企画「手紙で語る鷗外の交流」第2期「千駄木の先生 鷗外」の関連講演です。

鷗外が *maître* と呼ばれて慕われたことを木下幸太郎の日記を引用して紹介、続けて玉水俊成、與謝野晶子、齋藤茂吉と鷗外との関わりを、作品や資料をふまえながら講演いただきました。

玉水俊成については、鷗外が俊成から唯識論を学んで作品に反映させたこと、俊成が鷗外から学識を得たこと、双方についてお話いただきました。

與謝野晶子については、鷗外の講評、晶子が鷗外を詠んだ歌、鷗外の日記の該当部分から晶子の姿を浮き彫りにし、周辺の人々の交流ともあわせてまとめていただきました。

齋藤茂吉については、鷗外の『妄想』と、茂吉の『海濤』を比較し、作風の相似を指摘し、加えて、茂吉が鷗外作品の舞台となった地に赴いたことにも言及されました。

聴講者の方からは、「森鷗外と若い人々との関係が良くなった」、「興味深い資料と多岐にわたるお話に引き込まれました」との感想をいただきました。

親子プログラム

「本のおはなし・鷗外と外国の物語」

協力：全国学校図書館協議会

親子で文学の世界を楽しむプログラムの第2弾。

前回同様当館館長の案内で、参加者全員で展示会を鑑賞して鷗外が明治時代に船でドイツに涉つたことを学んだあと、講座室で徳田先生による本のおはなしを聞きました。

鷗外は明治時代にグリム童話など外国のおはなしを日本に紹介し、子供たちにもよく話して聞かせたといわれています。今回はグリム童話の中から「ヘンゼルとグレーテル」を紙芝居で、「はだかの王様」を絵本で鑑賞しました。そのほか、アンデルセン(デนมาร์ク)、ペロー(フランス)、ルイス・キャロル(イギリス)などヨーロッパの作家が書いた本がたくさん紹介されました。

先生のおはなしのあと、子供たちは、好きな絵本を手にとってお父さんやお母さんと一緒に楽しみました。子供たちが一目散に本に駆け寄る様子がとても印象的なプログラムでした。



日時 2013年5月18日(土) 13時半～15時
講師 徳田悦子氏 (東京学芸大学非常勤講師・全国SLAスーパーバイザー)

特別展開連講演会(第1回)

散歩する「青年」と「雁」



日時 2013年5月25日(土) 15時～16時半
講師 坂崎重盛氏 (エッセイスト)

鷗外と散歩について、さまざまな観点から講演いただきました。

散歩はもともと舶来の習慣で、明治以降、西欧文化に接した人々を介して日本になじんでいったそうです。鷗外が生きた時代はエリート学生の特権だったといえます。

『青年』では、散歩の意義に加え、東京方面図が散歩に便利な道具として用いられていることが述べられました。

『雁』では、物語の展開における散歩の役割が語られました。岡田は近代の、お玉は前近代の象徴で、別世界の2人が出会ったのは、岡田の散歩があったからという視点によるものでした。

さらに、散歩する鷗外の姿についての逸話や、文豪の隠されたユーモアといったお話もありました。

当館復刻の東京方面図や根津・千駄木の地図を見ながら聴講されている方々も見受けられました。「散歩という視点から見た鷗外の人間像の一部、作品内から見る視点が見え変わった」との感想をいただきました。

特別展開連講演会(第2回)

「いま・ここ」への注視

明治40年代の鷗外

「いま」は激動の明治40年代、「ここ」は日本の中核となる若者を育てる東京大学のある本郷界隈。1909(明治42)年10月26日・伊藤博文暗殺の日に、本郷の通りの方へ出る官員や東大生や一高生たちと『青年』の主人公は擦れ違う……。というような意識的な設定と構成について、「東京方面図」をはじめ「新撰東京名所図絵」や鷗外の創作小説の世界、そして文化の栄枯盛衰や価値観の変化といった多様な事例とあわせてお話いただきました。

現社会の諸問題に青年が真摯に向き合い対処してゆく展開は、近代の醸し出した諸問題に鷗外がどう対処するかの示しており、それが明治40年代の鷗外だったといえます。

「時代と鷗外の生き生きとした様子が浮かび上がってとても興味深かった」「東京名所図絵もとても楽しく見ることができました」との感想をいただきました。鷗外が常に現社会の問題を念頭に置いていたことが明快に伝わった様子でした。



日時 2013年6月9日(日) 14時～15時半
講師 須田喜代次氏 (大妻女子大学教授)

夏のプログラム

夏のプログラム13点から03〜13までを掲載しています。催しは03以外は全て事前申込制です。申込締切日(※)までにお申込み下さい。申込詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせ下さい。

03

7月9日

鷗外忌記念行事

森鷗外の命日(7月9日)に展覧会を観覧された方に記念品をプレゼントします。

04

*7月5日(必着)

7月15日 17:30~19:30

俳句講座2 句会 at モリキネカフェ

講師:佐藤文香(俳人)

05

先着順 *7月10日(必着)

7月20日 11:00~12:30

鷗外講座5 森鷗外の生涯4 晩年

講師:倉本幸弘

06

*7月10日(必着)

7月20日 14:00~16:00

鷗外忌記念対談 鷗外という二文字に思うこと

講師:小堀鷗一郎(国立国際医療センター名誉院長)

聞き手:倉本幸弘(森鷗外記念会常任理事・日本工業大学共通教育系非常勤講師)

森鷗外の命日(7月9日)を記念して、鷗外の次女杏奴のご子息である小堀鷗一郎氏をお招きしてお話いただきます。

07

*7月11日(必着)

7月21日 14:00~15:30

文の京ワークショップ 飛び出す手紙!

講師:野内隆(グラフィックデザイナー)

08

先着順 *7月24日(必着)

8月3日 11:00~12:30

鷗外講座6 ディスカッション

講師:倉本幸弘

09

*7月24日(必着)

8月3日 14:30~16:00

朗読会「田楽豆腐」「舞姫」

講師:内木明子(朗読家 相模女子大学非常勤講師)

10

*8月16日(必着)

8月26日 13:30~15:00

親子プログラム 漢字で遊ぼう!!

講師:野内隆(グラフィックデザイナー)

11

*8月16日(必着)

8月26日 18:30~20:00

文の京ワークショップ 真つ暗闇の朗読会

講師:野内隆、猪狩ともこ(イベントMC)

12

*8月20日(必着)

9月1日 14:00~16:30

新・観潮楼歌会 5人の歌人による公開歌会

講師:内山品太、大野道夫、服部真理子、花山周子、東直子

13

*9月19日(必着)

9月29日 14:00~16:30

新・観潮楼歌会 歌に親しむ

講師:東直子(歌人)

From 観潮楼主 No.3



左から鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨
1897(明治30)年4月 撮影:大橋乙羽

三人冗語の石

かつて観潮楼の庭石で、鷗外も腰かけた「三人冗語の石」が現存しています(表紙参照)。「三人冗語」の同人、鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨が、この庭石のそばで記念撮影をしており、それにちなんで後年「三人冗語の石」の名が冠されたといわれています。

「三人冗語」とは、鷗外が主宰する文芸評論誌「めざまし草」に連載された合評欄の題名です。3人の座談会形式で批評が展開、辛口評で知られ、文芸評論の権威といわれていました。ここで樋口一葉も絶賛されました。

観潮楼が焼失した後も、そのままの場所でのこの地の変遷を見続け、現在は記念館の庭の一角で植栽に囲まれながら悠然たるたすまいをみせています。

【交通案内】

●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅1番出口徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅1番出口徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅A3番出口徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス草63番系統「千駄木一丁目」下車徒歩1分
 - ・都バス上58番系統「団子坂下」下車徒歩5分
 - ・Bぐる千駄木・駒込ルート「18 特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL:03-3824-5511

URL:<http://morigai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00~18:00(最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日、年末年始(12月29日~1月3日)。

及び展示替期間、煙蒸期間等



文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum